

高山祭屋台の発達及び展開と構法の変容

令和元年 3 月

名古屋女子大学

青柳 由佳

高山祭屋台の発達及び展開と構法の変容

2019.3.28

名古屋女子大学

青柳由佳

1. 背景と目的

高山は岐阜県の北部に位置し、1966年という日本においては比較的早くから住民主導の町並み保存が行われ、1979年に三町、2004年に下二之町及び大新町が重要伝統的建造物群保存地区に指定された。一方高山祭は屋台23基が1960年に重要有形民俗文化財に指定され、1979年に「高山祭の屋台行事」として重要無形民俗文化財に指定されている。さらに2016年には日本の祭り33「山・鉦・屋台行事」の一つとして高山祭の屋台行事がユネスコ無形文化遺産に指定された。高山は伝統的建造物の保存と祭等無形文化財の保存が多面的に行われており、日本らしさを求めて現在世界各国から多くの観光客が訪れる街の一つとなっている。

高山祭は春の山王祭りと秋の八幡祭りの総称で、春の山王祭りは4月14日15日に行われ日枝神社の例祭であり12台の屋台が曳き揃えられ、秋祭りは10月9日10日に行われ山八幡宮の例祭であり11台の屋台が曳き揃えられる。

本稿は高山祭で引き揃えられる23台の屋台について創建年代、構造形式を文献により整理し、江戸時代に描かれたと考えられる春祭絵巻と現在の屋台を比較することで構法の変容を捉えることを目的とし、その要因を考察する。さらに周辺地域に残っていることが確認され調査が進むと考えられる9台（神楽台：8台、屋台：1台）の位置づけを行うための基礎資料となることを目的とする。

2. 調査方法

高山祭で引き揃えられる23台の屋台について創建年代、構造形式を既往文献により整理し、江戸時代に描かれたと考えられる春祭絵巻と現在の屋台を比較することで構法の変容を捉える。

3. 23基屋台の概要（長倉：高山雑考¹より引用）

現在春祭、秋祭で曳き揃えられる屋台23基について、高山雑考¹より各屋台の概要について年代と構法に関する記述を中心に以下にまとめる。

■ 日枝神社（春祭）

① 神楽台

初めの頃は白木の枠に太鼓を吊り二人で担いだものであった。1785（天明5）年に黒漆塗の荷車風のものにした。1811（文化8）年、神楽組から小前の者十三軒が別れて屋台の

太平楽を造り、別れた年に四つ車の屋台形態になったと言われる。現在の神楽台の素構となったのは1854（嘉永7）年の大改修によってできたと言われる。

② 三番叟

創立は宝暦年中（1751-63）と伝えられている。現在の屋台の素構となったのは、天保年間（1830-43）のものである。1835-37（天保6-8）年にかけてつくられた鳩峰車の記録に木代彫刻を含めた作料の記録があるため、天保初年の作と考えられる。その後大正に下段のみの補修を行っている。

③ 麒麟台

1784（天明4）年の火事により屋台を焼いたというが、この屋台がいつ頃できたか知る資料は発見されていない。天明火災後に建造され60年を経て、1845（弘化2）年に着手、2、3年後に完成したと考えられる。中段は、廻り縁はないが伊達柱はある。この屋台は1921（大正10）年に解体され、1933（昭和8）年に完成した。

④ 石橋台

組内の伝えでは天明年間（1781-88）の創建と言われているが、確かな資料はない。現在の屋台は文久から慶応2年（1863-1866）にかけて造られたものである。それ以前の屋台は古川町に譲ったが1865（慶応元）年の大火で焼失した。

⑤ 五台山

創建は不明であるが、組内には寛政年間（1789-1800）の記録があり、1801（享和元）年には屋台改造のための積立金を集めることが始められている。1801（享和元）年から積み立てて1807（文化4）年にほぼ竣工し、完成したのは1815（文化12）年であったと言われる。この屋台は1832（天保3）年の火事で下組の鳳凰台と共に焼失した。その後1837（天保8）年に再建され、1838（天保9）年より曳いている。この屋台が現在の屋台の素構となったもので、この設計図は小森家に残っている。龍の大金具を打った伊達柱を四隅に立てた。五台山組の記録には楯柱となっている。その後1887-90（明治20-23）年にかけて改修が行われ、昭和に入って2回目の改修が行われた。

⑥ 鳳凰台

創建は不明であるが、1799（寛政11）年に七福神のカラクリの大国天を現在の大国台に譲ったと言われ、屋台改修の期に人形を替えたものと考えられる。寛政年代に造られた屋台は、1825（文政8）年から修理の記録が書き込まれている。1830（天保元）年からつくられ始めた屋台は1832（天保3）年に完成後、一回曳いただけで1832（天保3）年火災により焼失した。その後1835（天保6）年に再建されている。伊達柱6本をつけたが縁を引

き込むたびに外さなければならぬために途中で使われなくなった。

明治大正の小修理を繰り返し、1962-64（昭和 37-39）年に根本的な大修理をした。また伊達柱が他の屋台より外側についているのは旧豊明台と同様伊達柱の初期の形である。

⑦ 恵比須台

創建年代は不明であるが、明和年中（1764-1771）に惺々緋幕と梅鉢染抜きの水引、幕絞紐を越前宰相より下附されたといわれている。1846（弘化 3）年に改修を着手し、1848（嘉永 1）年には曳いている。弘化年間の設計図が 2 枚残っている。その後 1883（明治 16）年に改修することとなり 3 年計画で漆を塗り直し、金具の増補洗滌が行われた。また古い柱や羅網は 1875（明治 8）年の大火で部分を焼いた行神台に譲られた。

⑧ 龍神台

創建は不明であるが、1775（安永 4）年に弁財天に猿楽を舞わせたと伝えられている。1815（文化 12）年に改造に着手し 1818（文化 15）年に完成した屋台が 1881（明治 14）年まで曳かれている。この屋台は現在の青龍台と同形で、台輪の上に宝珠柱を建て、青海波を入れた勾欄をめぐらし、内側に低い間をつくり、その上に前面に障子を入れて幕を張る。この分を下段とし、中段は蕨手の勾欄を巻き幕を四方に巻いた。上段は蕨手刎勾欄を置き、屋根は唐破風であった。その後古川町に譲っている。1880（明治 13）年改修の屋台が現在のものである。

⑨ 崑崗台

屋台組の記録として一番古いものに 1774（安永 3）年の「御祭礼請規」があり、創建は安永の初年であろうか。1813-15（文化 10 年-12）年までは屋台を曳かず大銘旗を出している。その後 1848-49（嘉永 1-2）年の 1 カ年で完成されたのが現在の屋台であるという。

⑩ 琴高台

1806（文化 3）年には曳順がなく、1807（文化 4）年に「布袋」の名で曳順があるため 1807（文化 4）年の創建ではないか。その後 1815（文化 12）年に「琴高」と名を替えている。1836-38（天保 7-9）年に大改修が行われ、組内に住んだ谷口家の人により設計図が描かれている。現在の屋台は 1891-92（明治 25-26）年に大改修されたものである。

⑪ 大国台

屋台組にある最も古い記録では、1796（寛政 8）年三月の祭りに「松樹台」として曳いており、この屋台は三段形式で上段柱は角柱であったという。1799（寛政 11）年鳳凰台組より大国天を譲り受けて大国台と改名しこの当時屋台の改修もされたと思われる。次の改修は 1847（弘化 4）年である。工匠は石田春臯で屋台を曳く時に前後左右にしなう動きの

美を出すために屋台構造を替えた。普通、伊達柱は上部の重量を支えていないのであるが、この屋台は欄間や上段の縁・勾欄を支えており、上段柱、屋根を支えているのは中段の中柱が上部で枳を組んだもので、枳と縁との間に透き間があり、伊達柱と上段縁の動きと、上段柱と屋根は違った動きをし、しなうの美をつくりだす。また上部の大きな動きを下で耐えるようにするためか、下段四隅の金具は蝶番となっている。弘化の改修後 1883（明治 16）年に補修が行われた。その後 1924（大正 13）年に伊達柱に龍の大金具を付けている。

⑫ 青龍台

創建年代は不明と言われるが、山王祭りの始まりといわれる 1716（享保元）年には屋台の形ができていたのではないかと推測される。昭和 30 年の改修時、中大輪に 1817（文化 14）年の改修の墨書が発見された。文化年中に造られた屋台は 1832（天保 3）年の大火にて焼失した。その後 1851（嘉永 4）年に再興され 1890（明治 23）年改修に着手し 1901（明治 34）年に細部以外大体の完成をみている。屋台は古い形を伝えているのであろうか、旧龍神台、高山から譲られた古川町の白虎台がこの形であり四段形態のようである。

■ 桜山八幡宮（秋祭）

① 神楽台

金森左京が大太鼓と獅子頭を寄進したことが神楽台の初めと言われ、荷車風にしたものは 1708（宝永 5）年と言われている。また 1718（享保 3）年屋台を曳く際の練物行列に氏子の有力者、風井長右衛門が神楽台を寄進したと言われる。その後 1815（文化 12）年に田中大秀の設計考証によって改造したものが出張りの周囲に勾欄を付けたもので、囃子方は自在に外から乗り降りできるようにし、これが高山の神楽形式の始考であるというが、この形の神楽台となったのは嘉永から安政年間（1848-59）にかけてではないかと考えられる。三輪であるこの神楽台は 1903（明治 36）年まで曳いた。1903（明治 36）年より中段に伊達柱をたてたものを再建し、1904（明治 37）年に曳いている。その後 1934（昭和 9）年に金具補強を行って完成した。

② 布袋台

創建は天明年間（1781-1789）と伝えられるが屋台は 2,30 年古いのではないかと推測される。現在の屋台は 1811（文化 8）年に竣工の記録があり、仙人台と共に最も古い屋台である。特色は台輪が小さく、その上に厚い台をめぐらし、下段の間はそのまま中段に延び、上部は中段の役目をしている。

③ 金鳳台

八幡祭の始めといわれる 1718（享保 3）年の祭行列に加わった四台の内の一台「猩々」が、二組に分かれて 1818（文政元）年に金鳳台と文政台になったと考えられる。また天明

年間（1781-1788）に曳いた記録があり、享保の後、宝暦（1751-63）の屋台があり文化の初年に破損後、約 10 年後にできたのが現在の屋台である。1817（文化 15）年に大工手間の記録が残っている。伊達柱はない。その後嘉永年間（1848-53）に修理を行っている。昭和 26 年に解体締め直し、上段の塗り直しを行った。

④ 大八台

高山の屋台で最初に三輪にしたのは大八台である。四輪では回転に難渋するが三輪ならば容易である理由によるが、重量があると三輪では不安定である。三輪で回転を容易にする方法は本体内に納めることであるが、この方法でつくられた屋台はたびたび転倒したため、大八台は二輪を台輪の外に付けることで安定を図った。1816（文化 13）年起工、1818（文政元）年完成した。その後明治 41 年に改修された。中段は他の屋台のように幕を張らず吹抜きとしている。

⑤ 鳩峯車

創建は 1747（延享 4）年といわれ、人形を買い入れた記録があるためである。この古屋台は下原村の八幡神社に保存されており、屋根は唐破風、上段柱は角、勾欄は四方切の蕨手刎、中段勾欄は前面切の欄干形で伊達柱はなく、四輪である。1835（天保 6）年再建することとなり、1837（天保 8）年に完成した屋台が現在の屋台の素構である。屋根は切破風、柱は朱の丸柱、御所車三輪とした。1855（安政元）年、神馬台に毀されて引けなくなり、1864（元治元）年修理のため講をつくり、1865（慶応元）年曳けるようにした。その後明治 28 年改修することとなり大正昭和の小修理をして今日に至る。

⑥ 神馬台

1718（享保 3）年 8 月の八幡祭の行列 48 の演し物のうち「高砂」という屋台が現在の神馬台である。1812（文化 9）年に高砂人形を譲り、1816（文化 13）年神馬人形を買入れ神間台となったと考えられ、この間に少しずつ補修をしたと推測される。その後、安政年間（1854-59）に改造され、これが現在の屋台の素構である。その後明治年間に補修されたが安政の形は崩さなかった。構造は台輪が他の屋台より巾が狭く、代わりに平台輪が厚い。中段の伊達柱はない。

⑦ 仙人台

1718（享保 3）年の湯の花組は行神台となり、上木屋組が新しく造った屋台が仙人台である。この屋台は明和（1764-1771）から安永（1772-1780）の初めに造られたものと考えられる。現在屋台組に残っている最も古い記録は 1793（寛政 5）年とある提灯箱の蓋の墨書である。1818（文政初）年に布袋台と同じ工匠によって改修されている。高山で最も古い形を伝えているのは布袋台と仙人台であり、布袋台は屋根を切破風に替え、仙人台は屋

根を唐破風に踏襲したが下段を替えた。これは高山型の下段の基礎を作ったものであろう。江戸から入った時代の屋台の屋根は全て唐破風であったと思われるが、現在ではこの屋台のみに残っている。

⑧ 行神台

八幡祭の始まりといわれる 1718（享保 3）年に曳いた屋台 4 台のうち「湯の花」が行神台だったのではないかと考えられる。人家が多くなるにつれ湯の花組から南は仙人台として分かれ、北に宝珠台が生まれたのではないかと考えられる。

現在の屋台の猩々緋の大幕は 1823（文政 6）年に購入したとの記録がある。中段勾欄に 1831（天保 2）年の墨書がありこの年代に改修され、1875（明治 8）年の大火に会うまで形を替えるような修理はなかったと考えられる。大火後 8 年間屋台のない時期があり 1883（明治 16）年に復興した。恵比寿台の大改修に伴い、伊達柱、上段柱、羅網、上段の簾などを譲り受けている。1903（明治 36）年を最後に屋台を休台することとなり、以後 50 年八幡神社に納められていたが、1951（昭和 26）年に復興した。その後 1969（昭和 44）年に大改修が行われた。

⑨ 宝珠台

1718（享保 3）年の湯の花組が分かれ、南が仙人台、北が宝珠台になったと考えられる。屋台が起工されたのは、組内にある古文書に「1827（文政 10）年屋台古び」とあるため安永（1772-80）の終わりか、天明（1781-88）の初めに創建されたと思われる。その後屋台が古びて曳けなくなり 1828（文政 11）年に起工された。下段が中段までのび下段の上部六ヶ所の柱の頭に宝珠を差していたと考えられ、この形は大体現在の布袋台、改修前の麒麟台と同じような形であったと推定される。屋根は唐破風の古い形であった。その後 1908（明治 41）年に大改造が行われ、これが現在の屋台である。中段は六色の宝珠は消え伊達柱はない。

⑩ 豊明台

創建年代は不明と言われているが、安永から天明の初年頃にはつくられていたのではないかと考えられる。その後 1835（天保 6）年に改造されている。かつて春祭の鳳凰台を修理した時取り外してあった伊達柱を復元、現在の伊達柱より外側に立てられていてその形が変わっていたのに驚いた。鳳凰台と同年代にできた豊明台も外側に建っており中段の勾欄は伊達柱の内側を通っている。伊達柱はこの頃に付けられるようになり 1、2 年後の琴高台、五台山、鳩峰車などは今日見るような伊達柱の位置に固定したと考えられる。その後 1899（明治 32）年に改造することとなり 1902（明治 35）年に一応終わったが、大正昭和と彫刻等が行われている。

⑪ 鳳凰台

1818（文政元）年に六台の屋台が復活したとの記述がある内の一つである。1851（嘉永4）年に屋台の改造に取りかかっており、屋台組に保存されている設計図によると形態は現在の屋台と大体同じであり、伊達柱も付けられた。1851（嘉永4）年の屋台改修決定後、1854（安政元）年に新屋台を曳いており、1856（安政3）年に完成した屋台を曳いている。その後1907-10（明治40-43）年に改修をした。

4. 屋台構法の変容に関する考察

4-1 現在の構造概要と用途

構造は、勾欄がある部分で段が変わると定義すると現青龍台を除き、上、中、下段の三段からなる（図2参照）。下段は車が設置され台輪が廻り下段の間という入口を兼ねる部分をもつ屋台がある。中段は上部構造を支えていない装飾としての伊達柱をもつ屋台があり、上段は4本柱で屋根を支えからくり人形が舞う。

内部空間における用途をみると、下段の間と中段が同一空間になっており、下段の間にお囃子の演者が乗り、中段には上段に行くための梯子がかかり、滑車によって上段部の上げ下げが行われ、からくり人形などの操作が行われる。

鳳凰台（八幡祭）での聞取りによると、祭の際は、お囃子は太鼓1人、スリガネ1人、笛2人の計4人が乗り込み演奏し、上段には子供が6-8人乗り込むという。

4-2 絵巻から見る構法の変容

江戸時代における春祭絵巻²と現代の屋台（春祭）²を比較したものが図1である。春祭絵巻には14台が描かれ、内3台は現在の高山祭で曳き揃えられる23台に含まれない応龍台、南車台、黄鶴台である。また現在高山祭で曳き揃えられる23台に含まれる琴高台は描かれてなく、その琴高台の創建は1807（文化4）年頃と考えられる¹。さらに創建が天明年間（1781-1788）と考えられる¹石橋台が描かれているため、春祭絵巻が描かれた時期は1781年から1806年頃と推定される。

春祭絵巻に描かれた上段部屋根の形式は、屋根を持たない神楽台と応龍台を除き12台の内9台が唐破風であり、その他に切妻1台、むくり屋根1台、入母屋1台である。現在（春祭）は青龍台の入母屋を除いては全てが切妻になっている。長倉¹によれば「高山の屋台は初めは唐破風であり、文化文政（1804-29年）から天保年代（1830-43年）までに切破風になり、明治期に切破風になったのは龍神台、宝珠台で、現在唐破風のままだのは仙人台のみで、唐破風の屋台を棺屋台として嫌ったため切破風に替わった¹」とある。

春祭絵巻に描かれた中段部は、鳳凰台を除き上段の4本柱をそのままおろした程度の大きさであり上段と中段の大きさは変わらないように見えるが、現在（春祭）は青龍台を除き中段の空間が大きくなっていることが読み取れる。また現屋台の多くに見られる伊達柱は春絵巻には見られない。

春祭絵巻に描かれた下段部は、鳳凰台を除き車上部の空間が大きく人が中に入りこの部分でお囃子が演奏されていたと想定できる。現在の下段は台輪と下段の間で構成されるものが多く、下段の間と大きくなった中段部分を使いお囃子の演奏が行われていると考えられる。

4-3 屋台雑考¹からみる各部構法の変容とその時期

長倉の屋台雑考¹より春祭絵巻に描かれた屋台から現在の屋台の姿に替わった時期をまとめると表1となる。先述したように春祭絵巻が描かれた時期は1781年から1806年頃と推定される。

①屋根

屋根をみると、春絵巻の屋台の多くが唐破風である。長倉は「高山の屋台は初め唐破風であり文化文政（1804-1829）から天保（1830-43）までに切破風に変わった。明治期に切破風になったのは龍神台と宝珠台で、現在唐破風のままなのは仙人台のみである¹」と示している。

②下段の間

長倉は「高山の屋台で最も古い形を伝えているのは布袋台と仙人台であり、これは文化文政より百数十年間小修理で形を替えていないからである。布袋台は1811（文化8）年、仙人台は1818（文政1）年に現在の素構がつくられている。またこの時期の仙人台が高山型の下段の基礎を作ったと考えられる¹」と示している。下段の間がつくられ内部への入口も兼ね、その部分に漆や彫刻が施されるような現在の原型が成立したと思われる。

③伊達柱

春祭絵巻には現屋台の多くに用いられる中段の四隅に立てられる伊達柱は見られない。長倉は「伊達柱は当初「楯柱」と呼ばれ（1837（天保8）年完成の五台山の記録）、1835（天保6）年に再建され現屋台の素構となった日枝鳳凰台の伊達柱は他の屋台より外側についており伊達柱の初期の形である¹」と示している。

④全体構成

長倉は「1851（嘉永4）年に現在の素構がつくられた青龍台は四段形態であり、古川町に譲り昭和初年まで曳かれた1818（文政1）年に完成した旧龍神台と同形であるため古い形を伝えているものと考えられる¹」と示している。現青龍台の構成は、春絵巻に描かれる多くの屋台の上段と中段の大きさのバランスとも同一であり、現青龍台が古い形を伝えているという長倉¹の考えを裏付けるものであると考える。

4-4 屋台構法の変容に関する考察

春祭絵巻と現在の屋台を模式図としてあらわしたものが図2である。春祭絵巻に描かれる屋台の実際の大きさが不明であるため、現在の屋台と高さの変化は大きくないと想定して上中下段のおおよその大きさを表した。変容していると考えられる点、及びその変容要

因に対する考察は以下の通りである。

① 唐破風から切破風への屋根形状の変化

屋根形状の変容要因は長倉¹により明らかにされている。

② 全体構成

屋台全体構成の変容をみると、春祭絵巻に描かれる多くの屋台が採用した上中下の三段構成は、空間のボリュームを替えずに四段構成とした現青龍台を除き、多くの屋台において下段の間の成立に伴い中段の間を拡大したものである。その変容要因は、内部空間の使い方と外観装飾の増加との関係によるものと推察される。

● 下段の間の成立と中段の間の拡大

春祭絵巻が描かれた頃の屋台の中段は、上段の控えの間としての役割があったものと推察される。上段はカラクリ人形等が行われ、上段には人が出るものではなかったと考えられる。春祭絵巻の崑崗台の上段には一人が出ているが半身を乗り出しているだけである。また長倉の屋台雑考¹（青龍台の稿）には「祭祀主催の特権を得た宮本が順道場で通過と確認の挨拶をして祭礼書式に捺印して通る時「頭子」といって上段から頭を出すことが禁じられた¹」とあり、重要人物を見下ろすような場に出ることが禁止されていたようである。封建的な江戸時代という時代背景を考えれば、祭の際においても上段に人が出る状態を極力避けるように配慮されたことは当然と考えられる。

現在の素構である屋台の中段が大きくなった要因として、下段の間ができたことにより下段の空間が小さくなりその分の空間として中段の空間を大きくする必要があったと考えられる。また中段の空間で担う作業が増えたため大きくする必要があったためとも考えられる。中段で担う作業の一つとしては、上部を上げ下げするための滑車を使った作業等が想定される。中段の空間が大きくなったことにより中段の勾欄に人が出ることが難しくなり勾欄は装飾として残された。

● 伊達柱の発生等を含む彫刻・金具装飾の増加

春祭絵巻に描かれた屋台をみると勾欄もシンプルであり彫刻等の装飾が見られず、屋台間の差別化は屋根の形や下段中段にかけられた布の模様等で図られていたと見て取れる。山本³は「高山の屋台に本格的な彫刻がとりつけられるのは天保以後で、工匠たちが腕を競ったのは見物人の目通りになる下段の彫であった³」と示すように、彫刻、漆、金具等が用いられ、それによって屋台の差別化が行われるのは、下段の間がつけられた時期や伊達柱がつけられた時期と重なり、文化文政天保と推測される。逆に言えば、伊達柱の発生や下段の間の発生は彫刻等を施す部分を多くし、他との差別化を図りたいとの旦那衆やそれを支えた工匠の技術の表れとも捉えることができる。

	春祭絵巻 (江戸時代)	現在	春祭絵巻 (江戸時代)	現在	
1 神楽台			8 龍神台		
2 三番叟			9 麒麟台		
3 応龍台			10 南車台		
4 恵比須台			11 五台山		
5 大國台			12 黄鶴台		
6 石橋台			13 崑岡台		
7 鳳凰台			14 青龍台		

図1 春祭絵巻に描かれた屋台と現在の屋台²

表1 屋台の構法変容の時期 年表

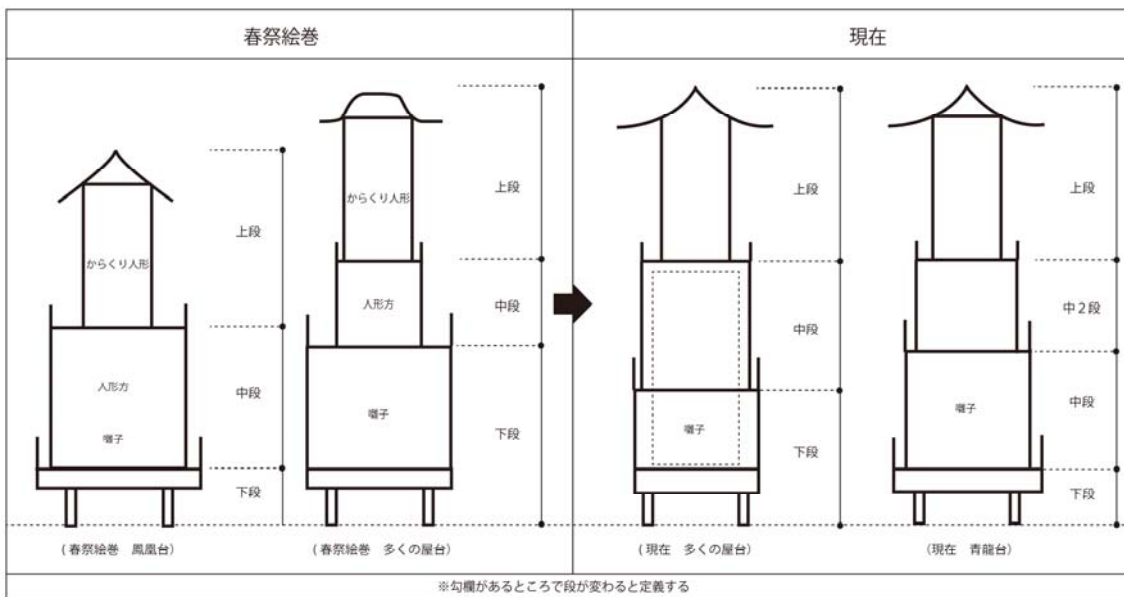
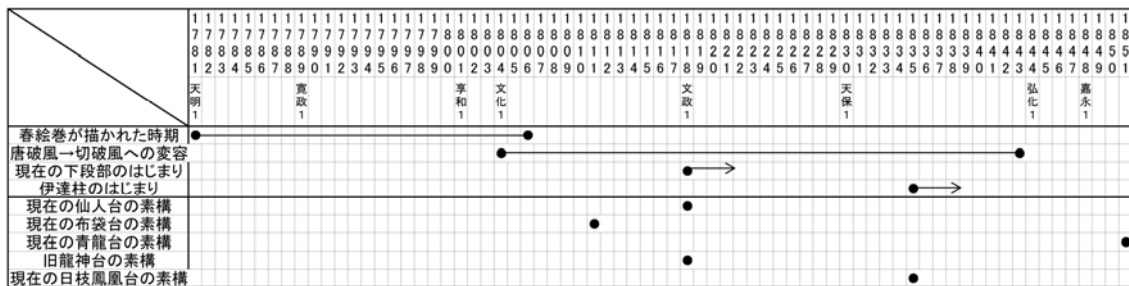


図2 屋台構法の変容に関する略図

5. まとめ

屋台の構法の大きな変容時期は、文化文政天保であったと考えられる。外観の変容は、屋根形状の変化、全体構成（下段の間の成立、中段の空間の拡大）、伊達柱の発生等を含む彫刻・金具装飾の増加に現れていた。その要因として下段の間の成立に伴い中段の間の用途の増加、他の屋台との差別化としての彫刻・装飾の増加が考察される。

本稿は既往文献等に基づいて調査を行い、構法の変容とその時期を明らかとした。さらにその要因について考察した。今後の課題として各屋台の聞取り等より各空間の使い方を明らかにすることにより、考察のさらなる裏付けへと展開することを期待し結びとする。

引用文献・参考文献

1. 長倉三朗：高山祭屋台雑考，慶友社，1981.12.10
2. 高山市教育委員会・高山屋台保存会：「屋台囃子の発表会と講演会」資料，2000.2.27
3. 山本茂実：高山祭-この絢爛たる飛騨哀史-，朝日新聞社，1977.12.10
4. 牛丸岳彦：高山祭屋台の瓔珞，財団法人 岐阜県産業文化振興事業団 研究事業報告，2005.3